

郷土への扉

The gateway to local history

奈良時代から平安時代にかけて、大隅半島一体は大隅国といいました。その政務を執る国府や、鎮護国家の役割を担った国分寺が国分にあつたとされ、現在の鹿児島神宮は大隅国※1一宮・大隅正八幡宮と呼ばれました。このように霧島市は南九州の政治・経済の中心都市として発展し、東アジアなどの貿易拠点の一つとして多くの品々がこの地を経由、全国に流通しました。今回はその中から、外国製の陶磁器である「貿易陶磁器」の出土品を紹介します。

出土した主な貿易陶磁器

本市は交易品の消費地でもありません。中世の貿易陶磁器が市内でも多く出土しているのは、国の史跡「大隅正八幡宮境内及び社家跡」です。中国製の青磁や白磁、青白磁、青花、朝鮮半島からもたらされた高麗青磁、東南アジアのタイやベトナムの陶器など、種類や年代はさまざまです。

一方、正八幡宮周辺に比べ国府跡



橋木城跡の青磁の酒会壺



弥勒院跡の飛青磁の花瓶



小田松木菌遺跡の白磁の合子

発展の名残とどめる 「貿易陶磁器」

や国分寺跡周辺からはあまり出土していません。中世になると、国分寺は台明寺(国分台明寺にあつた寺院)に役割を譲るなど両者の勢力が弱まり、人が減って品物が集まらなくなったためだと考えられます。台明寺跡の発掘調査はまだ行われていないので、調査をすると多くの貿易陶磁器が見つかるかもしれません。

中世に築かれた市内の山城で発掘調査をした数少ない例の一つが、横川町中ノの横川城跡です。青磁の碗や皿、盤、白磁の皿などが多く出土し、権力者がいたことが分かります。

国分重久の橋木城跡は平成5年の水害で崖が崩落しました。その際に採集された物も多数あります。中には酒会壺と呼ばれる、14世紀前半頃

の青磁の破片があります。酒会壺は酒を貯めておくために使われたと考えられ、出土例は少なく貴重な物です。

さらに珍しいのは、正八幡宮の別当寺(神社を管理する寺)だった弥勒院跡から出土した飛青磁の花瓶の破片です。弥勒院跡は現在の宮内小学校にあります。飛青磁は13〜14世紀頃の中国の青磁で、黒い斑点が付いています。完全な形で残っている大阪の物は、国宝に指定されているほど貴重な物で、遺跡から出土した例も国内で数例のみです。

新たな大発見

今年の9月、全国の貿易陶磁器研究者が集まる研究発表が本市でありました。その中で、隼人町小田の小

田松木菌遺跡から出土した白磁の合子(ふた付きの小さい容器)が紹介されると、ある専門家が「12世紀の中国福建省産の物で、現在国内ではこの1点しか確認されていない」という見解を示しました。このように霧島市は多くの貿易陶磁器が出土しており、海外との貿易拠点の一つであつたことが分かります。今回紹介した物はごく一部ですが、出土品の多くは市内の郷土館などに展示しています。皆さんもぜひご覧ください。

(文責 坂元)

※1 仏法によって国家の安泰を祈願すること。
※2 地域の中で最も位が高いとされる神社。

